Journal of Inclusive Education

Printed 2018.0228
Online ISSN: 2189-9185
Published by Asian Society of Human Services

"Zamami no Genkan" Megumi MIYACHIKA

February 2018
VOL. 4

Asian Society of Human Services

DOI: doi.org/10.20744/incleedu.4.0_74
Journal of Inclusive Education, VOL.4 74-86

ACTIVITY REPORT

キャリア教育に関する肢体不自由特別支援学校教員の意識調査
―子どもの「夢や願い」と授業実践との関連―

Survey on Teachers' Consciousness in Providing "Career Education" in Special Needs School for Physically Handicapped Children: The Relation with Children's Dream and Wish and Class Practice

越智 文香 [1)], 越智 彩帆 [1)], 樫木 暢子 [2)], 苅田 知則 [3)], 加藤 公史 [4)]
Ayaka OCHI, Ayaho OCHI, Nagako KASHIKI, Tomonori KARITA, Koji KATO

1) 愛媛大学大学院教育学研究科特別支援教育専攻
Graduate School of Education, Special Need Education Department, EHIME UNIVERSITY

2) 愛媛大学大学院教育学研究科
Graduate School of Education, EHIME UNIVERSITY

3) 愛媛大学教育学部特別支援教育講座
Faculty of Education, Special Need Education Course, EHIME UNIVERSITY

4) 愛媛大学教育学部附属特別支援学校
Special Support School, Faculty of Education, EHIME UNIVERSITY

＜Key-words＞
キャリア教育, 肢体不自由児, 教員の意識
Career Education, physically handicapped children, Teachers' Consciousness

opico128@gmail.com（越智 文香）

Journal of Inclusive Education, 2018, 4:74-86. © 2018 Asian Society of Human Services

ABSTRACT

Received
2018 / 1 / 19

Revised
2018 / 2 / 2

Accepted
2018 / 2 / 16

Published
2018 / 2 / 28

肢体不自由児本人の願いを活かしたキャリア教育を進めていくために、肢体不自由特別支援学校におけるキャリア教育に対する教員の意識と課題を明らかにし、本人の願いを組み込んだ授業づくりのあり方を検討することを目的とした。肢体不自由特別支援学校教員を対象にキャリア教育に関するアンケートを実施し、キャリア教育の考え方、担当する児童生徒について、学部間比較と教育課程間比較を行った。学部が上がるほど、「将来の生活」について考えていること、夢や願いにおいて、「将来への思い」が高まっていることが読み取れた。自立活動を主とする教育課程においては、キャリア教育の視点を活かした授業づくりに対し、様々なイメージを持っている一方で、「将来につながる授業」のイメージが、他の教育課程に比べて低いことが示された。重度重複障害の子どもたちのキャリア教育においても児童生徒のライフキャリアを踏まえたキャリア教育を検討していく必要がある。また、本人の夢や願いを表出する力を高める指導を追究し、教育活動に取り入れていく必要があると考える。

DOI: doi.org/10.20744/incleedu.4.0_74
Journal of Inclusive Education, VOL.4 74-86

Ⅰ．問題と目的

文部科学省中央教育審議会（以下、中教審とする）答申（2011）「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」では、キャリア教育を「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」と定義した。この定義が提示された背景には、キャリア教育について一人一人の教員の受け止め方や実践の内容・水準にばらつきがあったことが一つ挙げられる。本定義では、職業的自立のみをめざしたものではなく、より広義の自立をめざしたものであること、幼児期における諸活動及び初等教育段階からの教育課程全体を通して取り組むべきものであること、「4 領域 8 能力」や「基礎的・汎用的能力」等の育成そのものを意味するのではないことが重視された。

脇田・藤井・河合ら（2015）は、特別支援学校におけるキャリア教育について、特別支援学校教員を対象とした質問紙調査を行い、キャリア教育についての意識の現状と課題に言及している。キャリア教育を推進する必要性を感じている学校が大半である一方、「定義の共通理解」「具体的実践イメージ」については不十分であることが明らかになった。障害種別にみると、キャリア教育の推進の必要性に関して、肢体不自由単一設置校のみが「とても必要性を感じる」「どちらかというと必要性を感じる」の合計が 8 割に満たなかった。また、特別支援学校におけるキャリア教育の推進状況においても「積極的に推進している」「推進している」「一部取り組みを進めている」の合計が 7 割に満たなかったのは肢体不自由単一設置校のみであった。この結果より、肢体不自由校のキャリア教育の認識が他の障害種別に比べて低いことが指摘されている。

中教審（2011）では、キャリア教育の意義と効果の一つとして、「キャリア教育を実践し、学校生活と社会生活や職業生活を結び、関連づけ、将来の夢と希望と学業を結びつけることにより、生徒・学生等の学習意欲を喚起することの大切さが確認できる。このような取組を通じて、学校生活が抱えている様々な課題への対処に活路を開くことにもつながるものと考えられる。」と示している。また、渡部（2012）は、「本人の願いや夢や希望を年間指導計画に位置付けて指導を行うことは、本人が意欲的に学習に取り組むきっかけになることはもちろん、その願いを社会的に意味づけすることによって、他の活動への広がりにつなげていくことが可能となるなど、重要な意味をもっている。」と述べている。夢や願いはキャリア形成に重要だとされつつも、柴田・菊地（2010）によると、授業のねらいとして設定しにくい項目として、「夢や希望」が最も多いとの結果もある。大崎（2011）は特別支援学校 5 校の個別の教育支援計画を収集、その「願い」の欄に着目し「本人の願い」の欄の有無と記述内容について調査した。その結果、本人の「願い」欄がない、「願い」が具体的ではない、または本人のものになっていないなどの点が明らかになった。また、大崎（2012）によると、重度・重複障害のある児童生徒の人生を考えるときに、何らかの「あきらめ」によって、本人の願いが叶えられなかったり、様々な思いを捨てざるを得なかったりすることもあるようだ。「願い」の把握や「願い」を踏まえた実践を探求することが求められるが、その取り組みや解決のための知見が限られているという現状がある。

本研究では、肢体不自由児本人の願いを活かしたキャリア教育を進めていくために、肢体不自由特別支援学校におけるキャリア教育に対する教員の意識を明らかにし、キャリア教育の授業づくりにおける課題を提示することを目的とする。

DOI: doi.org/10.20744/incleedu.4.0_74
Journal of Inclusive Education, VOL.4 74-86

Ⅱ．方法

1. 対象

肢体不自由児を対象とする A 特別支援学校及び B 特別支援学校に在籍する教員 183 名を対象とした。

2. 実施期間

20XX 年 11 月下旬に配布し、12 月上旬に回収した。

3. 実施・回収方法

A 校は返信用封筒を同封したアンケートを郵送にて配布し、郵送で回収、B 校は手渡しにて配布、回収した。

4. 回収数・率

A 校は 44 件配布し 41 件の回答、B 校は 139 件配布し 68 件の回答があった。回収率は、A 校 93%、B 校 49%であった。合計回収率は 60%で、欠損値を除く有効回答が 82 件であった。なお、回答者のプロフィールの重複回答があったため、学部比較（小学部低学年、小学部高学年、中学部、高等部）においては 79 人、教育課程別比較〔小学校・中学校・高等学校の各教育課程に準ずる教育課程（以下、準ずると示す）5 名、知的障害者である児童生徒に対する教育を行う特別支援学校の教育課程を代替する教育課程（以下、知的代替と示す）24 名、自立活動を主として指導する教育課程（以下、自活主と示す)〕においては 69 人で結果を処理した。なお、本来は自由記述部分も同様の処理をする必要があるが、貴重な意見が多かったため、自由記述については、プロフィールが明らかな回答を有効回答とした。自由記述部分の回答数は 106 件であった。

5. 調査内容

質問項目Ⅰは回答者プロフィールで、①性別、② 教員経験年数、③ 職種、④担当する児童の教育課程、⑤担当の学部と担当学年とした。回答方法は選択式もしくは記述式とした。

質問項目Ⅱはキャリア教育の考え方について質問し、①学部・学年によるキャリア教育の意識、②キャリア発達にかかわる能力の重視度、③キャリア教育の視点を生かした授業づくりのイメージとした。①は選択式及び記述式、②は特別支援教育総合研究所が作成し、各地で用いられている「キャリアプランニング・マトリックス（試案)」を元に作成し、「キャリア発達に関わる能力」とし、表 1 に示した。各能力の重視度を、1 を「全くそう思わない」、7 を「とてもそう思う」の 7 件法で尋ねた。また、③は記述式とした。

質問項目Ⅲは担当している児童生徒について、①児童生徒が好きだと思われるものやこと、人、②児童生徒の夢や願い、③夢や願いや好きなことを活かした授業の実践例とした。①は選択式、②及び③は記述式で回答を求めた。

DOI: doi.org/10.20744/incleedu.4.0_74
Journal of Inclusive Education, VOL.4 74-86

表 1 キャリア発達にかかわる能力

能力	育てたい力
人間関係形成	A 人とのかかわり／自己理解・他者理解
	B 集団参加／協力・協同
	C 意思表現
	D 挨拶、清潔、身だしなみ／場に応じた言動
情報活用	E 様々な情報への関心／情報収集と活用
	F 社会資源の活用とマナー／法や制度の理解
	G 金銭の扱い／金銭の使い方と管理／消費生活の理解
	H はたらくよろこび／役割の理解と働くことの意義
将来設計	I 習慣形成
	J 夢や希望
	K やりがい／生きがい・やりがい
	L 進路計画
意思決定	M 目標設定
	N 自己選択／自己選択（決定・責任）
	O 振り返り／肯定的な自己理解
	P 自己調整

6. 分析方法

質問紙への回答に欠損が見られる回答を除いた、計 82 部を分析の対象とした。自由記述の回答結果について、すべての回答から共通点がある記述を集めて複数のカテゴリーに分類し、命名した。なお、1 つの回答に複数の内容の記述が含まれる場合には、文意が変わらないことに留意しつつ記述を内容ごとに区切って分類した。また、回答のカテゴリー分類後に再度記述内容を検討し、各回答を更に下位分類に分けて命名した。質問項目Ⅱ②キャリア発達にかかわる能力 16 項目の重視度についての 7 件法を用いた質問については、統計解析ソフトウェア R ver.3.3.2 を用いて、分析を行った。キャリア発達にかかわる能力の各項目同士の傾向を知るために、相関分析を行った。相関がみられた場合に知的障害児を対象に作成されたキャリアプランニング・マトリックス（試案）における能力が肢体不自由児のキャリア発達においても重要視されているのかどうか、因子分析を行い検討することとした。

7. 倫理的配慮

学校長に分析時に匿名化し個人は特定されないことなどを書面と口頭で説明し同意を得た。アンケート回答者には紙面で説明した。また、文章記載時にも匿名性を重視し個人が特定されないようにした。

DOI: doi.org/10.20744/incleedu.4.0_74
Journal of Inclusive Education, VOL.4 74-86

Ⅲ. 結果

1. アンケート対象のプロフィールについて

学部別と教育課程別の対象教員の合計数の内訳は、表 2、表 3 のとおりである。

表 2　学部別の人数

学部	人数
小学部低学年	20 名
小学部高学年	16 名
中学部	26 名
高等部	17 名
計	79 名

表 3　教育課程別人数

教育課程	人数
準ずる	5 名
知的代替	24 名
自活主	40 名
計	69 名

2. キャリア教育の考え方について

① 学部・学年によるキャリア教育の意識について

学部・学年によるキャリア教育の考え方について、「意識している」「意識していない」それぞれについて、カテゴリー化した回答を表 4、表 5 に示した。「意識している」という回答について、どんな点を意識してキャリア教育を行っているかという質問をした。そこで、「将来の生活」「他者との関わり」「基本的生活習慣」「授業づくりの観点」等、12 のメインカテゴリーが抽出された。そのうち以下の 3 点に関しては、サブカテゴリーが抽出された。

「将来の生活」については、＜知識・技能の習得＞＜コミュニケーション能力＞＜今できることの活用＞というサブカテゴリーが抽出され、将来に身につけておくべき能力についての回答が多く抽出された。

「他者との関わり」については、＜コミュニケーション能力＞＜意思伝達＞というサブカテゴリーが抽出された。対話に重点をおいたものと自分の思いを伝えることを重視するものの 2 つにカテゴリー分けができた。

「基本的生活習慣」については、＜生活習慣＞＜マナー＞というサブカテゴリーが抽出された。

「意識していない」という回答について、その理由は何かという質問をした。そこで「意識していない」「自活主に当てはまっていない」「分からない」等の 5 つのメインカテゴリーが抽出された。サブカテゴリーは抽出されなかった。学部間比較では、高等部で「将来の生活」についての回答の割合が高く、他学部に比べて、将来に直接結びつく知識や技能を特に重視していることが読み取れた。教育課程間比較では、「意識していない」と回答した割合は自活主が最も高かった。また、「今のキャリアの観点が自活主に当てはまっていない」という、自活主ならではの回答もあった。「分からない」のカテゴリーの中には、「キャリア教育自体がよく分からない」といった回答もあった。

DOI: doi.org/10.20744/incleedu.4.0_74
Journal of Inclusive Education, VOL.4 74-86

表 4 学部・学年によるキャリア教育の意識 「意識している」自由記述回答

メイン カテゴリー	サブ カテゴリー	具体例	回答数
将来の生活	知識・技能の習得	将来に役に立つ知識・技能を身につけること	20
	コミュニケーション能力	将来人と関わり、やりとりをしながら生活できること	7
	今できることの活用	将来の働く生活のどの場面に、今の活動を活かせるかと常に考えながら指導を行っている	5
他者との関わり	コミュニケーション能力	コミュニケーション能力の向上	13
	意思伝達	自分の思いを相手に伝える力	8
基本的生活習慣	生活習慣	基本的生活習慣	7
	マナー	マナー	3
今の生活		自身の持てる機能を活かして自分のことはできるだけ自分でしようとする気持ちを育てること	7
授業づくりの観点		年間計画、授業内容を考えるうえで、キャリアの観点を取り入れる	6
好きなこと		いろいろな活動を経験して、好きなことを見付けたり、増やしたりする	4
ICT の活用		AAC の活用	3
自分の役割		プリントの提出や給食ボードの貼り換えなど、簡単な仕事を依頼し、褒められたり感謝されたりする機会を設けている	3
進路指導		進路指導	2
全ての活動		授業だけでなく、学校生活の一つ一つの場面がキャリア形成に重要な場面であるということを意識するようにしている	2
自己肯定感		自己肯定感	2
その他		本人の意識をどのように高めていくか	8

表 5 学部・学年によるキャリア教育の意識 「意識していない」自由記述回答

メイン カテゴリー	サブ カテゴリー	具体例	回答数
意識していない		意識しないほうが、子どもの実態に合った場に応じた支援がしやすい	4
自活主に当てはまっていない		自活主の生徒たちに育ってほしいと思う観点が能力領域にあまり含まれていない	4
分からない		キャリア教育自体がよくわからない	4
段階でない		児童がキャリア教育を意識する発達段階でない	2
昔と変わらない		特に新しい内容という捉え方をしていないので	2

② キャリア発達にかかわる能力について

学部間比較では、学校生活が始まる小学部低学年は、I.習慣形成に重点をおいていた。L.進路計画、N.自己選択/自己選択（決定・責任）、O.振り返り/肯定的な自己理解では、高等部

が他学部よりも重視しており、社会に出るうえで必要だと考えていると言える。

表 6 に「キャリア発達にかかわる能力」についての相関分析の結果を示した。キャリア発達にかかわる能力について、有意な相関があるものは、F.社会資源の活用とマナー/法や制度の理解と G.金銭の扱い/金銭の使い方と管理/消費生活の理解等で r=0.79 であった。C.意志表現と N.自己選択/自己選択（決定・責任）については、異なる能力であるが、r=60 とやや有意な相関があった。自分で選択をして意志を表現するというつながりが読み取れた。

このように「キャリア発達にかかわる能力」について、相関がみられた（有意水準は.01 と定めた）ので、主因子法、プロマックス回転による因子分析を行い、4 つの因子を抽出した。その結果、解釈可能な 4 因子が抽出された。各因子への負荷量の低い項目 D、M を順次除外し、最終的に 14 項目が選び出された。それらの項目について、再度因子分析を行った結果、解釈可能な 3 因子が抽出された。各因子の因子負荷量を表 7 に示した。第 1 因子は“I 習慣形成”“O 振り返り/肯定的な自己理解”など 8 項目で「自己形成力」と命名した。第 2 因子は“E 様々な情報への関心/情報収集と活用”“H はたらくよろこび/役割の理解と働くことの意義”など 4 項目で「情報活用力」と命名した。第 3 因子は“A 人とのかかわり/自己理解・他者理解”“B 集団生活/協力・協同”の 2 項目で「関係形成力」と命名した。

表 6 「キャリア発達にかかわる能力」 相関分析結果

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P
A	1.	.60	.35	.33	.18	.21	.15	.12	.28	.21	.34	.22	.28	.39	.27	.23
B	.60	1.	.38	.34	.14	.16	.22	.14	.30	.07	.17	.07	.25	.33	.14	.15
C	.35	.38	1.	.28	.10	.05	.10	.02	.53	.43	.40	.26	.30	.60	.28	.32
D	.33	.34	.28	1.	.38	.51	.54	.43	.20	.21	.43	.24	.29	.28	.31	.43
E	.18	.14	.10	.38	1.	.71	.64	.53	.19	.32	.29	.25	.42	.34	.39	.47
F	.21	.16	.05	.51	.71	1.	.79	.62	.22	.34	.37	.39	.49	.31	.34	.49
G	.15	.22	.10	.54	.64	.79	1.	.77	.27	.35	.33	.41	.50	.24	.41	.44
H	.12	.14	.02	.43	.53	.62	.77	1.	.25	.36	.47	.34	.50	.25	.47	.47
I	.28	.30	.53	.20	.19	.22	.27	.25	1.	.65	.50	.52	.48	.52	.39	.40
J	.21	.07	.43	.21	.32	.34	.35	.36	.65	1.	.67	.67	.54	.53	.56	.43
K	.34	.17	.40	.43	.29	.37	.33	.47	.50	.67	1.	.49	.51	.51	.54	.57
L	.22	.07	.26	.24	.25	.39	.41	.34	.52	.67	.49	1.	.61	.38	.45	.46
M	.28	.25	.30	.29	.42	.49	.50	.50	.48	.54	.51	.61	1.	.50	.59	.50
N	.39	.33	.60	.28	.34	.31	.24	.25	.52	.53	.51	.38	.50	1.	.52	.48
O	.27	.14	.28	.31	.39	.34	.41	.47	.39	.56	.54	.45	.59	.52	1.	.59
P	.23	.15	.32	.43	.47	.49	.44	.47	.40	.43	.57	.46	.50	.48	.59	1.

表 7 キャリア発達にかかわる能力 因子分析結果

	Factor1	Factor2	Factor3
A			0.67
B	-0.284	0.147	0.949
C	0.531	-0.262	0.356
E		0.704	
F		0.858	
G		0.947	
H		0.772	
I	0.734	-0.114	0.115
J	0.999		-0.235
K	0.767		
L	0.723	0.115	-0.185
N	0.597		0.256
O	0.601	0.186	
P	0.465	0.303	
SS loadings	3.960	2.974	1.665
Proportion Var	0.283	0.212	0.119
Cumulative Var	0.283	0.495	0.614

③ キャリア教育の視点を活かした授業づくりのイメージについて

教育課程間比較では、自活主で、「将来につながるもの」について他の教育課程に比べて、回答の割合が低かった。また、全てのカテゴリーに回答があったのは、自活主のみであり、キャリア教育の視点を活かした授業づくりに対し、様々なイメージをもっていると言える。

3. 担当している児童生徒について

① 児童生徒の好きなもの・ことについて

学部別比較では「その他」について、学年が上がるにつれて、回答の割合が上がっていた。

教育課程間比較では、自活主では他の教育課程に比べて、「家族」「教員」「おもちゃ」「遊具（ブランコ等）」「揺れ遊び」「水遊び」「音楽鑑賞」「音」について、回答の割合が高かった。家族や教員といった多く関わる人や、音楽や音などの聴覚刺激、揺れ遊びや水遊びなどの感覚刺激を好んでいることが読みとれた。

② 夢や願いについて

カテゴリー化した児童生徒の夢や願いについての回答を表 8 に示した。児童生徒の夢や願いについて、「将来への思い」「他者と関わることへの思い」「学校への思い」「外界への思い」「分からない」等、18 のメインカテゴリーが抽出された。そのうち 5 カテゴリーに関しては、サブカテゴリーが抽出された。

「将来への思い」については、具体的な将来への願いから、就職まで、将来の生活について回答され、＜具体的な職種＞＜就職＞＜働く生活＞＜具体的な仕事内容＞等、7 点のサブカテゴリーが抽出された。

DOI: doi.org/10.20744/incleedu.4.0_74
Journal of Inclusive Education, VOL.4 74-86

「他者と関わることへの思い」については、関わることそのものに重点をおくものと、具体的な関わり方を示すものが回答され、＜関わり＞＜生活＞＜会話＞＜活動＞＜遊び＞の 5 点のサブカテゴリーが抽出された。

「好きなこと・得意なことへの思い」については、＜する＞＜増やす＞＜活かす＞の 3 点のサブカテゴリーが抽出された。

「身体状況への思い」については、健康面の願いと、動作面の願いが回答され、＜健康の保持＞＜歩く＞＜動く＞の 3 点のサブカテゴリーが抽出された。

「学校への思い」については、登校することへの願いと、学校の活動への願いが回答され、＜登校＞＜学校生活＞というサブカテゴリーが抽出された。

学部別の比較をすると、学年が上がるにつれて「将来への思い」の回答の割合が上がっている。一方、「好きなこと・得意なことへの思い」では、学年が上がるほど、回答の割合が低くなっていた。

③ 夢や願いや好きなことを活かした授業の実践について

児童生徒の夢や願いや好きなことを活かした授業実践の内容についての自由記述の質問に対して、55 人が回答し、複数回答を可としたため、71 件のデータが回収された。表 9 に夢や願いや好きなことを活かした実践例を示す。

児童生徒の夢や願いや好きなことを活かした実践内容について、「好きなもの・ことを活かす」「調べ学習」「役割を活かす」等、9 点のメインカテゴリーが抽出され、以下の 2 点に関してサブカテゴリーが抽出された。

「好きなもの・ことを活かす」では、好きなものや好きなことを授業の中でどのように活用するかについて最も回答数が多く、＜きっかけとして＞＜教材として＞＜題材として＞＜選択肢として＞＜そのもので遊ぶ＞の 5 つのサブカテゴリーが抽出された。

「願いを活かす」では、学校卒業後の願い、現在の願いでカテゴリー分けをし、＜将来の願い＞＜今の願い＞の 2 つのカテゴリーを抽出した。実践例は少なかったが、児童生徒の願いが明確だからこその実践内容であった。「好きなもの・ことを活かす」について多くの回答があった。一方、「将来の願いを活かす」については回答があまり得られなかった。

DOI: doi.org/10.20744/incleedu.4.0_74
Journal of Inclusive Education, VOL.4 74-86

表 8 児童生徒の夢や願い

メインカテゴリー	サブカテゴリー	具体例	回答数
将来への思い	具体的な職種	漫画家になりたい	8
	就職	就職する	7
	働く生活	人の役に立って、喜んでもらえるようなお仕事をする	7
	具体的な仕事内容	パソコンを使った仕事をしたい	4
	孝行	就職して親を助けたい	3
	自立	一人暮らし	2
	福祉サービス	生活介護の受けられる施設	2
他者と関わることへの思い	関わり	友達とたくさん関わりたい	20
	生活	たくさんの人とのかかわりの中で、元気に楽しく暮らす	8
	会話	家族や教員、友達と話したりしたい	8
	活動	好きな先生と一緒に勉強したい	7
	遊び	友達と仲良く遊びたい	6
好きなこと・得意なことへの思い	する	好きな音楽を聴いて過ごしたい	14
	増やす	好きなこと、ものを増やす	8
	活かす	人と話すことが好きなので、それを活かしたい	3
身体状況への思い	健康の保持	健康に生活する	11
	歩く	歩けるようになりたい	5
	動く	身体をたくさん動かしたい	4
学校への思い	登校	元気に学校に行きたい	8
	学校生活	元気に楽しく学校生活を送る	7
余暇の充実への思い		ダンスが上手になりたい	12
楽しい日々への思い		毎日元気で笑顔で過ごす	11
家族との暮らし		家族と楽しい生活をしたい	10
意思表示への思い		自分の思いを伝えることができるようになる	10
穏やかな生活への思い		ストレスのない毎日	9
外界への思い		自分でいろんなところに行ってみたい	5
食への思い		もっとたくさん食べられるようになりたい	5
生活への思い		生活リズムを整えたい	4
発音への思い		発音が明瞭になりたい	2
分からない		分からない	14
ない		具体的にない	7
保護者の願い		福祉センター（保護者）	3
その他		今のままがいい	5

DOI: doi.org/10.20744/incleedu.4.0_74
Journal of Inclusive Education, VOL.4 74-86

表 9 児童生徒の夢や願いや好きなことを活かした実践例

メインカテゴリー	サブカテゴリー	具体例	回答数
好きなもの・ことを活かす	きっかけとして	生単の授業の導入で、2 択クイズをする。クイズ自体が好きなので、好きなので、内容に興味をもって取り組むきっかけとなる。	14
	教材として	カラーボールを投げて遊ぶことが好きな児童に対して、カラーボールを使って、色の分別の学習を行った。	13
	題材として	児童の好きなものを文字や言葉の学習で取り上げる	10
	選択肢として	本人の自己選択を大切に、絵本の読み聞かせを継続して行っている	7
	そのもので遊ぶ	最後に ipad や音の出るおもちゃを使って、好きな遊びをする。課題をする中で、本人の好きなものを見つけ、それに合わせるように課題を変えていく	2
願いを活かす	将来の願い	本人の夢を実現させるために、どのようなことを学習したらよいかを一緒に考え、関連のあることを題材に授業を進める。日常生活の中にも、モチベーションにつながる言葉掛けを行う	5
	今の願い	発表会の劇では、児童の希望を聞いて配役を決めた	3
感触を活かす		導入時に音遊びや音楽を聴く、又は食べ物（宝物）を見せたり、食べたりすることをしたことがある	4
調べ学習		すきなものについて本やインターネットを使用し、調べたことを記事にまとめる	3
身体機能を活かす		独歩の難しい児童に対し、体を固定する自転車の練習をして、ペダルをこいで自力で前に進める（数メートル）ようになった	3
調理実習		調理…たくさん食べることを目標に、調理を楽しみ、食べる期待感を高める	2
役割を活かす		自分でお仕事をして、それを達成する。感謝されることを素直で喜べる子供なので他のクラスの友達が使うおしぼりを朝の会でたたみ、クラスへもっていくなど、目標を持って仕事を与え、それをこなしている（毎朝）	1
生活経験を活かす		A.B については、金を扱うお店シリーズの経験を生かした店員やお客に交互になっての、授業実践をしている、AB とも生活経験を通しての活動内容なので活気がある	1
その他		そのような授業を目指しているところです	3

DOI: doi.org/10.20744/incleedu.4.0_74
Journal of Inclusive Education, VOL.4 74-86

Ⅳ. 考察

1. キャリア教育の考え方

キャリア教育においては一貫性や系統性が重要なことからも、学校教育において教員が学部・学年にかかわらず、将来の生活に重点をおくことで、将来を見通した継続的な教育が可能になることが考えられる。その際、障害種別、教育課程に応じたキャリア発達の課題を捉えることも重要である。また、学部・学年によるキャリア教育の意識については、「自活主に当てはまっていない」というカテゴリーが抽出された。自活主の児童生徒のキャリア形成に向けた指標が必要であると考えられる。

キャリア発達の能力について、本調査では「自己形成力」「情報活用力」「関係形成力」という 3 つの能力が抽出された。国立総合特別支援教育研究所の「キャリアプランニング・マトリックス（試案)」は知的障害を対象に作成しているため、肢体不自由の場合では障害の重度化に対応したカテゴリーが必要であろう。

キャリア教育の視点を活かした授業づくりにおいては、自活主の児童生徒は、一人一人の障害の状態が多様であり、発達の諸側面にも差があるため、児童生徒のニーズに応じたキャリア教育のイメージがあることが考えられた。また、「将来につながるもの」に関して自活主の回答の割合が低かった。障害の重度重複化により、将来へのイメージがもちにくいことが考えられる。

2. 担当している児童生徒の夢や願いについて

キャリアの視点を活かした授業実践については、児童生徒の好きなものや好きなことを授業の中で多く活用しており、児童生徒の意欲を引き出すための工夫がなされていた。渡部（2012）は、児童生徒の好きなことや願いを活かすことは、子どもの生き方に共感することになると述べている。小学部低学年の段階から様々な経験をし、好きなことを活かした授業の中で、子ども主体のキャリア形成を促進することが大切であると考える。

自活主の児童生徒の好きなものやことの代表的なものは、深くかかわる人や感覚に関するものであった。教員が子どもとのかかわりの中で、様々な刺激を用意し、子どもの好きな感覚を把握しようとしていることが推察された。感覚を介した人との関わりは、人間関係を形成するうえでも重要なものであると考えられ、また、感覚を介した活動を発展させることで新たな興味にもつながることも期待できる。児童生徒の好きなことものに関して、「その他」の項目で、学部が上がるにつれて、回答の割合が高くなっていた。様々な経験をしていく中で、好きなものやことが多様化していくこと、コミュニケーション能力の発達、拡充により、好きだと人に伝えられるようになることが考えられる。一方で、児童生徒が言葉での表現が難しい場合、願いは抽象的になってしまう場合があることが読み取れた。教師や保護者、関係者等、多くの人が連携して、本人の立場に立って検討し、把握をしていく必要がある。

夢や願いについては、学年が上がるにつれて、働く生活を目標とした夢や願いの割合が増えていた。年齢による職業意識や社会生活への思いの高まりとともに、授業づくりにおいて、教員がキャリア教育を意識していることも影響しているだろう。

大崎（2012）は、環境や時期が整っていないことによって、児童生徒本人が願いをあきらめることがあることも述べている。1 人 1 人のキャリア発達を考え、児童生徒が夢や願いに向かって主体的に取り組めるよう、環境を調整し、周囲の人々との連携を図り、願いを活かした活動を積み重ねることが重要である。

DOI: doi.org/10.20744/incleedu.4.0_74
Journal of Inclusive Education, VOL.4 74-86

Ⅴ．まとめと今後の課題

肢体不自由児に応じたキャリア発達課題が意識されていることが明らかになり、また学年や教育課程に応じたキャリアを意識していることも考えられる。一方で、学年や教育課程にかかわらず、児童生徒の将来を踏まえたキャリア教育を意識することも重要である。

キャリア教育の分類については、従来のキャリアプランニング・マトリックスは知的障害のある児童生徒を対象に作成されている。障害の重い子どもたちに適応したカテゴリーを考えることで、より授業づくりに反映させやすくなると考える。また、本研究では、対象校が 2 校のみであった。対象校を増やすことでもっと明確なデータが得られ、運動機能障害や障害の重度重複化に対応したキャリア発達課題を考える一助となるであろう。

本研究において夢や願いを尋ねたところ、「働く生活」の視点からの回答が少なかった。障害の状態によっては、いわゆる就職が難しい場合もある。また、生活経験の不足による限定的な興味関心、職業体験不足も一因であろう。教師は児童生徒が「働く生活」の視点に基づいた願いももてるように、活動や授業を設定する必要があると考える。また、好きなことを活かした授業の実践については、一定行なわれているものの、本人の夢や願いを活かした実践については、あまり行われていなかった。肢体不自由特別支援学校は重度重複化が進んでいることから、夢や願いを把握しにくい可能性がある。児童生徒が夢や願いを表現できるようにする指導も含めて、本人の夢や願いについても複数の人の目で把握し、教育活動に取り入れていく必要があると考える。

今後は、調査範囲を広げ、地域の社会資源の違いなどからも検討していきたい。また、教員が重視していることと、実際の教育計画や教育実践との関連についても検討していきたい。

文献

1) 文部科学省(2011) 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について.中央教育審議会答申.
2) 菊地一文・松為信雄・杉中拓央(2012) 特別支援学校におけるキャリア教育の認知度及び研修ニーズに関する実態調査(1)(2). 日本特殊教育学会第 50 回大会発表論文集.
3) 大崎博史(2011) ―特集―キャリア教育の視点による個別の教育支援計画における「本人の願い」の把握及び支援の充実を図るためのツールの開発と試行. 国立特別支援教育総合研究所研究紀要, 38, 48-50.
4) 大崎博史(2012) 特別支援教育充実のためのキャリア教育ケースブック. 菊地一文(編). ジアース教育新社, 200.
5) 柴田琢磨・菊地一文(2010) 特別支援学校（知的障害）におけるキャリア教育の観点「夢や希望」を踏まえた指導に関する一考察. 日本特殊教育学会第 48 回大会論文集, 627.
6) 渡部英治(2012) 特別支援教育（肢体不自由）におけるキャリア教育の在り方に関する研究 ―教育課程の改善と児童生徒の「夢や希望」を大切にした授業づくり―. 特別支援教育研究論文 ―平成 23 年度―, 10, 20.
7) 国立特別支援教育総合研究所(2010) 知的障害のある児童生徒の「キャリアプランニング・マトリックス（試案)」.

Journal of Inclusive Education
Asian Society of HUMAN SERVICES

- Editorial Board -

Editor-in-Chief	Atsushi TANAKA	University of the Ryukyus (Japan)
Executive Editor	Changwan HAN	University of the Ryukyus (Japan)

Aiko KOHARA
University of the Ryukyus (Japan)

Aoko CHINA
National Institute of Vocational Rehabilitation (Japan)

Eonji KIM
Miyagigakuin Women's University (Japan)

Haejin KWON
University of Miyazaki (Japan)

Hideyuki OKUZUMI
Tokyo Gakugei University (Japan)

Iwao KOBAYASHI
Tokyo Gakugei University (Japan)

Kazuhito NOGUCHI
Tohoku University (Japan)

Keita SUZUKI
Kochi University (Japan)

Kenji WATANABE
Kio University (Japan)

Kohei MORI
Mie University (Japan)

Liting CHEN
Sophia School of Social Welfare (Japan)

Mika KATAOKA
Kagoshima University (Japan)

Mikio HIRANO
Tohoku Bunka Gakuen University (Japan)

Nagako KASHIKI
Ehime University (Japan)

Shogo HIRATA
Ibaraki Christian University (Japan)

Takahito MASUDA
Hirosaki University (Japan)

Takashi NAKAMURA
University of Teacher Education Fukuoka (Japan)

Takeshi YASHIMA
Joetsu University of Education (Japan)

Tomio HOSOBUCHI
Saitama University (Japan)

Toru HOSOKAWA
Tohoku University (Japan)

Toshihiko KIKUCHI
Mie University (Japan)

Yoshifumi IKEDA
Joetsu University of Education (Japan)

Editorial Staff

- Editorial Assistants	Mamiko OTA	University of the Ryukyus (Japan)
	Sakurako YONEMIZU	Asian Society of Human Services

Journal of Inclusive Education
VOL.4 February 2018
© 2018 Asian Society of Human Services
Editor-in-Chief Atsushi TANAKA

Presidents Masahiro KOHZUKI・Sunwoo LEE

Publisher Asian Society of Human Services
Faculty of Education, University of the Ryukyus, 1 Senbaru, Nishihara, Nakagami, Okinawa, Japan
FAX: +81-098-895-8420 E-mail: ashs201091@gmail.com

Production Asian Society of Human Services Press
Faculty of Education, University of the Ryukyus, 1 Senbaru, Nishihara, Nakagami, Okinawa, Japan
FAX: +81-098-895-8420 E-mail: ashs201091@gmail.com

Journal of Inclusive Education
VOL.4 February 2018

CONTENTS

ORIGINAL ARTICLES

Development of Scale for Coordinate Contiguous Career; Scale C³.....**Changwan HAN**, et al. 1

Fostering the Local Special Education Centers for a Special Needs Education School for the Physically Disabilities and an Investigation for How the Organization Should Handle.....**Osamu ISHIDA**. 21

Analysis of Teaching Method for IN-Child Showing Behavior Similar to Autism Spectrum Disorder .....**Mamiko OTA**, et al. 36

SHORT PAPERS

Survey on Expertise and Education Training Required for Teachers Involved in Visually Impaired Education .....**Miku TANAKA**, et al. 54

Analysis of Curriculum on Psychology, Physiology and Pathology of Intellectual Disorder in University Teacher Training Course: Consideration based on Change of Medical Diagnostic Criteria for Intellectual Disorder.....**Natsuki YANO**, et al. 67

ACTIVITY REPORT

Survey on Teachers' Consciousness in Providing "Career Education" in Special Needs School for Physically Handicapped Children: The Relation with Children's Dream and Wish and Class Practice..... **Ayaka OCHI**, et al. 74

Published by
Asian Society of Human Services
Okinawa, Japan